

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月10日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720122

研究課題名（和文） 横光利一『上海』をめぐる「上海表象」と新カント派哲学の理論的影響の研究

研究課題名（英文） Representation of Shanghai and influences of Neo-Kantianism philosophy in YOKOMITSU Riichi's novel "shanghai."

研究代表者

位田 将司（INDEN MASASHI）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：80581800

研究成果の概要（和文）：横光利一の小説『上海』は、新カント派の哲学理論の影響のもと書かれたことが判明した。新カント派は、多様性の中に普遍性を、普遍性の中で多様性を維持する理論を構築した。横光はその哲学理論を応用することで、「上海」が多様で異なる国民や民族を内包しながらも、同時に彼らが共存できる秩序を「上海」に見出し、小説として構成したのであった。「上海」は横光にとって文学理論そのものを表現する場所だったのである。

研究成果の概要（英文）：In novel "Shanghai" of YOKOMITSU Riichi, it was recognized that "Shanghai" was written by influence of a philosophical theory of Neo-Kantianism. At that time, Neo-Kantianism have constructed a theory to maintain the diversity in universality, the universality in diversity. By applying Neo-Kantianism philosophical theory, YOKOMITSU is, he was found the order of Shanghai was enclosing a variety of ethnic and national, and he wrote the order of the city as a novel. City of Shanghai was the place that expressed literature theory itself for YOKOMITSU Riichi.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：横光利一・上海・新カント派・日本近代文学・アヴァンギャルド・新感覚派・モダニズム・認識論

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究当初は、横光利一の小説『上海』を、新カント派の哲学理論と関連させて解釈するという事は、皆無であった。その原因は、従来横光の文学理論はカントの哲学の「引き写し」であるとみなされていたことにあるだろう。

(2) 小説『上海』の実証的、書肆的な研究は進んでいるものの、理論的な研究は相対的

に少ないと言わざるを得ない。しかも、理論的な研究は記号論的、テキスト論的な解釈がほとんどで、同時代哲学との関連を解明する研究は、少ないと言わざるを得ない状態であった。

2. 研究の目的

(1) 横光利一の文学理論と新カント派の哲学理論の関連の分析が、必要だということである。これまで横光利一は、カントの哲学そ

のものを「引き写し」、自らの文学理論としていたとされていた。このような先入観が結果的に、横光の文学理論と、同時代哲学との理論的連関を分析することを、見過ごさせてしまったのである。そこで、横光が新カント派の哲学を援用していたということを、実証的に証明し、横光の文学理論を同時代の思想の文脈に措定することを可能にしようとした。またここで重要なのは、日本における新カント派の受容、翻訳の受容は、ほぼヨーロッパと同時的に進行していたということである。この事実の解明によって、横光が摂取していた新カント派の哲学思想が、日本国内の事情だけにとどまらない、世界的な思想文脈の中に位置づけられるようになるのである。横光利一と新カント派の理論的な影響関係を明らかにすることで、これまであまり顧みられなかった、日本文学と新カント派の関係、そして横光利一と世界的な思想との関係から、日本文学とヨーロッパ思想の関係を広く分析することを目的とすることができた。

(2) 二つ目の目的は、「上海」という都市を表象可能にする理論を解明することにあった。横光が「上海」という都市を小説の中で表現しようとしたのは、偶然ではなかったのである。横光が新カント派哲学による文学理論を構築していたがゆえに、横光は「上海」を小説化したのである。この理論的な必然性を分析する必要がある。「上海」は、横光が渡航した当時から、多様な国民・民族が共存する場所であり、アジア経済の中心地でもあった。そこには多様な人的ネットワークから、経済的ネットワークまでが、「上海」という都市を作り上げていたのだ。この複雑で把握が困難な秩序を持つ都市を、横光はなぜ描写できたのか。この描写可能にした理論こそが、新カント派の哲学理論であり、小説『上海』の基底にある文学理論に他ならない。この都市「上海」と、小説『上海』、そして新カント派の哲学理論が交差する場所を、分析するのが目的である。

3. 研究の方法

(1) 一つ目の方法は、日本語に訳された新カント派の書籍、および雑誌に掲載された新カント派の哲学記事の収集にあった。当時日本で翻訳された新カント派関連の書籍、記事は膨大な量で、これらを収集し、精読・分析することで、新カント派の哲学が、1920～30年代にかけて、日本にどのような思想的インパクトを与えていたのかを、解明することが必要だったのである。

(2) また、この当時隆盛を誇っていた、マルクス主義関連の書籍、雑誌記事の収集も行

った。当時のマルクス主義理論は、文学にまでおよび、マルキシズム文学を文壇の中心にまで押し上げていた。横光はこのマルキシズム文学との文学論争の中で、新感覚派としての立場を強固にしてきたのである。ならば、このマルクス主義理論と横光の関連性を視野に入れなければならないのは当然である。また、横光は小説『上海』を「唯物論者」というタイトルで発表しようとしていたことから、マルクス主義と横光、そして小説『上海』の関係は、切っても切り離せないものとして考えなければならないだろう。また、新カント派の哲学は、カントとマルクスの理論的な関係を同時代において模索していたことを考えても、方法として、マルクス主義関係の書籍、『戦旗』、『文芸戦線』などの資料発掘も行う必要があったのである。

4. 研究成果

(1) 成果としては、これまではっきりしてこなかった、横光の文学における「形式主義」を支えた理論が、実証的にも、理論的にも解明が進んだということである。これまで横光の文学理論に関しては、玉村周「横光利一に於ける『新感覚』理論——「感覚活動」の解釈を中心として——」(『国語と国文学』一九七八・九)によって、横光の評論「新感覚論——感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説——」(初出「感覚活動——感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説」、『文芸時代』一九二五・二)(以下「新感覚論」)が、カントの哲学を援用して構築されている、という解明しかなされてこなかったのである。玉村の成果を引き継ぎながら、カントと横光の理論的な関係性をさらに分析する必要があったが、それはなされなかったのである。そのなされなかった原因は、横光の文学理論をカント哲学の「引き写し」として、そこに歴史性、同時代性、世界性を見出さなかったことにある。横光とカントの理論的な連関は偶然性の中で、消失してしまったのである。しかし、小説『上海』と新カント派との理論的な影響関係を調査していく過程で、新カント派の哲学理論は、横光のみならず、同時代の日本近代文学に大きな影響を与えていたことが判明したのだ。この新カント派の哲学理論が、横光の作家活動の全体を貫いていることは、「横光利一と「関東大震災」——「根拠=ground」が揺れる——」(『文芸と批評』二〇一一・一一)で示した。横光が評論「新感覚論」以来、新カント派の哲学によって、創作活動を行ってきたことを示すことができたのである。これによって、横光と新カント派との影響関係は、国内の閉じられた関係性から考えるのでは不十分であり、当時のグローバルな思想であった、新カント派から横

光利一のテキストを読む、という契機を作ることができた、といえるだろう。

(2) また、小説『上海』と新カント派の理論的な関係を分析する過程で、横光とマルクス主義との関係性を、新たに発見することができた。横光は新感覚派の中心人物になった時、当時文壇で勢いを増していたマルキシズム文学との対決姿勢を強めていた。横光は自らの立場を、文学の「唯物論」として定めており、マルクス主義を文学の指導理論としていた陣営と、対決したのである。このような状況から、横光とマルクス主義理論の関係性は指摘されていたのであるが、具体的にどのような関係性であったかは、ほとんど検証されていない、といってよかった。横光の「上海」渡航の同年、「唯物論的文学論について」（初出「文学的唯物論について」、『創作月刊』一九二八・二）の中で横光は、マルクス『資本論』の一節を引いている。この一節を調査すると、岩波文庫の『資本論 第一巻*第一分冊（第一篇第一章）』（河上肇、宮川実訳、一九二七・一〇）の本文が、ほぼそのまま引用されていることがわかった。そしてこの引用箇所は、「商品の物神崇拜的性質とその秘密」なのである。横光は「上海」渡航直前、『資本論』の当該箇所に注目していたことがわかる。そして、この解明によって、横光がなぜ「上海」の金融市場を、あれほど詳細に小説の中に取り込もうとしたのかの問題が、解釈可能になってくるのだ。横光とマルクス主義理論の関係は、はっきりとしていなかったが、この引用箇所の原典が解明され、横光が『資本論』のいかなる箇所に興味を持っていたか的一端を知ることができたことで、横光とライバル関係にあったマルキシズム文学との関係性も、さらにはっきりしてくるものと考えられる。横光が「上海」を経済と金融のネットワーク構造で構成されており、小説『上海』の登場人物たちの命運もその渦中で大きく変化していくと理解できたのも、『資本論』の「商品」の項目に注目していたところから、納得がいく解釈を導くことが可能となったのである。横光とマルクス主義との関係性を再解釈するような可能性を、『上海』の調査の中から得られたことは有意義であった。さらにこの横光の「上海」における経済と金融の考え方は、現代のグローバル金融都市となった「上海」を理解するうえでも、大切な歴史的な資料となるのである。この成果は、「横光利一『上海』における「共同の論理」—「形式」・「商品」・「機械」—」（『早稲田現代文芸研究』二〇一三・三）で詳細に論じることができた。

(3) この小説『上海』における新カント派の理論的な影響を考察する過程で、3つ目の

成果を上げることができた。それは、横光の作家生活の最晩年においても、新カント派の哲学の影響が持続していたという事実である。これまで横光の生涯は、前期の「形式主義」、一九三〇年に発表された『機械』によって、新心理主義へと移行して行き、晩年は「日本回帰」に至るといって、単線的な文学史が支配的であった。しかし、横光の「形式主義」が、新カント派の哲学理論の強い影響を受けていたことが、本研究課題で明らかになった上で、その影響が横光の晩年にまで理論的な影響を及ぼしていたことが解明できたのである。この解明によって従来のような、横光をめぐる単線的な文学史は、再考を迫られることになるだろう。新カント派の哲学は、対極にある概念、例えば、「普遍」と「特殊」という概念的な対立を、いかにして和解させることができるのか、という理論的な試みを行っていた。それが小説『上海』でならば、多様な経済システムや国民・民族が、いかにして一つの「上海」という都市で共存できるのかという問題につながるものである。新カント派は、このように対立概念を和解させるような形式を探求していたのだが、横光もまた、同じく「純粹小説論」（一九三五）でも、「偶然」と「必然」という、対立概念を和解させる「純粹小説」を構想していたのだ。この横光の初期から、晩年にいたるまでの新カント派の影響の問題は、「横光利一『微笑』という「視差」（パララックス・ビュー）—「排中律」について—」（『日本文学』二〇一二・二）で論じた。小説『上海』から15年後に執筆された、最晩年の小説『微笑』（一九四八）にも、新カント派の理論的な影響を指摘することができたのである。これによって横光利一を、日本国内の文学史に閉じ込めるのではなく、新カント派という世界的な思想から、一貫性を持って解釈することが可能になったのである。そしてこの、新カント派の理論的持続は、早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WIJLC）と、フランス国立東洋言語文化研究学院（INALCO）が共催した、国際シンポジウム「記憶の痕跡」（2012年10月13日）でも、口頭発表という形で報告をした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

(1) 位田 将司、横光利一『上海』における「共同の論理」—「形式」・「商品」・「機械」—、早稲田現代文芸研究、査読有、3号、2013年、pp.74-90

(2) 位田 将司、横光利一「日輪」の構想力と「神話」の構造—「形式主義」を予告する—、早稲田現代文芸研究、査読有、2号、2012年、pp.133-152

(2)研究分担者
なし

(3) 位田 将司、横光利一『微笑』という「視差」—「排中律」について—、日本文学、査読有、60巻2号、2011年、pp.26-36

(3)連携研究者
なし

(4) 位田 将司、横光利一と「関東大震災」—「根拠=ground」が揺れる—、文芸と批評、査読無、11巻4号、2011年、pp.21-44

〔学会発表〕(計2件)

(1) 位田 将司、横光利一『夜の靴』に内在する『欧洲紀行』の痕跡、早稲田大学国際日本文学・文化研究所(WIJLC)、フランス国立東洋言語文化研究学院(INALCO)共催国際シンポジウム「記憶の痕跡」、2012年10月

(2) 位田 将司、横光利一『微笑』という「視差」—「排中律」について—、日本文学協会第31回研究発表大会、2011年7月

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

位田 将司 (INDEN MASASHI)
早稲田大学・文学学術院・助手
研究者番号：80581800